

【研究ノート】

荒尾精の鐘崎三郎・山崎羔三郎に対する弔詞 —福岡県内における九烈士「三崎」の葬儀に際して—

向野堅一記念館館長 向野正弘

はじめに

日清戦争・遼東半島において、六名の通訳官が特別任務・軍事探偵として放たれた。彼らは、漢口楽善堂・日清貿易研究所の関係者であり、この六名の内、山崎羔三郎・鐘崎三郎・藤崎秀の三名は、金州城外に刑死した。遺体はその後発見され、火葬に付され、一部は金州郊外の通称「三崎山」に葬られ、その他の遺骨は郷里へと移送された。また大熊鵬・猪田正吉の両名の消息は最後までわからず¹、結局、生還したのは向野堅一唯一人だけであった²。

今回、福岡県内で行われた鐘崎三郎と山崎羔三郎の葬儀について調べたところ、荒尾精が両者の葬儀に弔詞を記していることを確認した³。ここでは、経過を略述し、その上で、二つの弔詞を紹介することとした。

一、遼東半島における動きと二人の葬儀— 向野堅一『従軍日記』より—

遼東半島において、向野堅一を中心とする関係者は、五名の通訳官の行方を探索していた。「三崎」の死は、明治二十七年十一月八日、金州入城後、刑科机上の文書にて、十月三十日に処刑されたことを確認した。向野堅一は、この書類を携え、第二軍司令部の根津一の元に馳せ参じ、経緯を話

し、文書を手渡し、もう一人の人物と三人で「互ニ涙ヲ振フテ嘆」じたと記している⁴。

通訳官は兵士・軍人ではない。軍属ではあるが、この場合には、それにとどまらない特別任務を負っている。その死に対する対応について、向野堅一は、

却説〔さて〕、今回秘密偵察ノ任ヲ負ヒシ山崎氏外四名ノ事ニ付テハ、軍人部内大ニ心配被致〔いたされ〕、諸君之命、無之〔これなき〕以上ハ致方無之〔いたしかたこれなく〕、死後ノ方法ニ尽力可致〔いたすべき〕事肝要ニ候。先月、神尾中佐帰国ノ上、大本営ニテ、此等大任ヲ帯ビテ、殉難被致候〔いたされそうろう〕諸士ニハ、特別之御取扱有之様〔これあるよう〕、略内定致候由〔いたしそうろうよし〕。

(『従軍日記』明治二八年一月十八日)

と記している。「軍人部内」における議論の内容はわからない。しかし「死後の方法に尽力致す可き事」を基本に、神尾光臣中佐の帰国に際し、大本営に見解を伝え、対処することとなった。いつのことであるかは記されていないが、「十二月二十八日」付けの神尾光臣から青木村村長宛の書簡があり⁵、この書簡によって、公式に死去を伝

達し、これ以後、郷里における葬儀に向けての動きが始まることになると思われる。

向野堅一は、十二月二十日に金州より大連湾に行き、御幡雅文に面会⁶。鐘崎遺族の事を相談し、明治二十八年一月十二日に、別の友人が御幡雅文と鐘崎の子息の件について相談し、さらに十四日、向野堅一が、騎馬で大連湾に行き、御幡雅文と相談している。鐘崎に対しては御幡雅文が窓口となって、連絡を取っていることがわかる⁷。

鐘崎三郎については、複雑な事情があるにしろ、窓口となった御幡雅文は家庭内の人間関係を知悉しており⁸、鐘崎三郎の郷里では、年明け早々に、葬儀に向けて動き出したものと推察される。

ところが山崎羔三郎に関しては、妻子なく、養子である上に父母も亡く、遺族扶助を受ける対象もよくわからない。そこで、一月十八日、向野堅一から実兄の白水致^{しろすず}に書信が送られた。この書信を受けた白水致にしてみると、どうもよくわからないことが多いのである。実は、遼東半島において、事態が大きく動くのは、二月に入ってからのものであり、したがって鐘崎関係者も山崎関係者も、一月末の段階では少ない情報の中で動かねばならなかった。

遼東半島では、二月五日に遺体に関する情報を入手し、六日に地上調査を実施、感触を得た上で、七日に遺体を発掘した。午後五時半までかけて、遺骨の大部分を収集した。しかし完全ではなく、残りは翌日に持ち越さざるを得なかった。翌八日、別の友人に遺骨収集を依頼し、向野堅一は御幡雅文の元へ向かう。そこで向野堅一は、御幡雅文より鐘崎三郎の郷里での葬儀が九日であることを知らされるのである。

このことはどういう意味を有すか。鐘崎三郎の葬儀は、極めて少ない情報に基づき、遺骨もない中で行わねばならなかったということである。一方山崎羔三郎の葬儀は、一月半後の三月二十六日である。したがって、まず遺骨がある。そして刑死の事情も明らかになっている。その上、その経緯は極めて日本人のナショナリズムを刺激する内容であり、そのことは新聞を通じて全国的な関心を集めることとなっていた⁹。

二. 荒尾精の山崎・鐘崎等の訃報に接しての心境

荒尾精の山崎・鐘崎等の訃報に接しての心境を記した記録がある。

廿六日附芳書拝見。鐘崎、山崎、藤崎等五名偵察中被逢惨害候趣〔さんがいにあわれそうろうおもむき〕、兼て覚悟の事と奉存候得共〔ぞんじたてまつりそうらえども〕、東洋の為深く可惜事共御座候。迂生入山以来、傍ら学問に志し候共〔そうらえども〕、乍御恥敷事〔おはずかしきことながら〕、意必固我の根、最も深く、汚染殊に厚く、尋常にては到底根治六敷〔むつかしき〕と存候間〔ぞんじそうろうあいだ〕、刻苦奮励常に厳密武毅の力を由来り候処〔そうろうところ〕、近来稍々困勉変じて易簡平和と相成申候〔あいなりもうしそうろう〕に付、此多欲界には最早心を引くもの無之候得共〔これなきそうらえども〕、唯時に心を動かすものは旧新同盟諸君が、非命一事に御座候〔ごぞそうろう〕。(井上雅二『巨人荒尾精』東亜同文会、一九三六、第

一篇第六章 戦時の勇退「牧山震太郎宛書簡」、pp.64-65)

牧山震太郎からの来簡に対する返信で、ここで言う「廿六日」が何月のことなのかはわからない。一つ後の書簡は「十二月念二日」つまり二十二日のものであり、この前とすれば、十一月二十六日ということになる。彼らは自ら志願した者であり、覚悟のことと納得するものの、「東洋の為」に惜しまれることとする。この文面によれば、荒尾精は籠もって勉強しており、世俗のことには関心を有さない心境であるとする¹⁰。ただし「旧新同盟諸君」の非命の死には関心を有している。「旧同盟諸君」とは漢口楽善堂関係者を、「新同盟諸君」とは日清貿易研究所関係者を指すと解される。

三. 荒尾精の故鐘崎三郎に対する弔詞

納戸鹿之助『烈士の面影』（高島英、一九二四）、同『烈士 鐘崎三郎』（納戸鹿之助、一九三七）は、荒尾精の弔詞を採録していない¹¹。ただ納戸書は綿密な調査の上になるもので、この弔詞を採録しない点は奇異に感じる。なお荒尾精のものとして、別に二月六日付けの書簡を採録している¹²。経緯を考えるために必要と思うので、まずこの書簡の内容を掲げておこう。

貴翰拝読、貴諭の趣、委細拝承仕候〔はいしょうつかまつりそうろう〕。然るに鐘崎君御履歴書は、目下当地に何も取持不仕〔とりもちつかまつらず〕、誠に今回の御高志に背き、千万遺憾、奉存候得共〔ぞんじたてまつりそうら

えども〕、他日結局の上、上海研究所より詳細の履歴も取寄、目下遠征相成居〔あいなりおる〕諸同志帰朝の上は、委員を設け、殉難者の事蹟、相綴可申〔あいつづりもうすべく〕心組に御座候間〔ござそうろうあいだ〕、何卒〔なにとぞ〕暫時御待被下度〔おまちくだされたく〕、奉希望候〔きぼうたてまつりそうろう〕。先〔まず〕は右得貴意度〔きいをえたし〕。

早々拝復

二月六日

荒尾 精

内田勒三 殿

中村綱次 殿

つまり「履歴書」の無いことをもって弔詞を書くことを断る内容である。山崎羔三郎の兄白水致が苦慮してただけでなく、荒尾精も事情がわからず苦慮していたのである。

ところが山本紫嶺（亀三尾）『志士鐘崎三郎』（長崎刊行会、一九三八・三）は、『福陵新報』記事より荒尾精の弔詞を掲載している。ここでは『福陵新報』二月十三日記事と付き合わせて掲げることとする。

嗚呼、天乎命乎。命吾固知、吾子之不避難矣。而不謂其冒難之如此烈也。吾固知、吾子之不辞死矣。而不謂其致死之如此慘也。嗚呼、痛哉。憶、吾子之始遊清國也、能斷世縁之難斷、能忍人情之難忍。人或疑其薄於倫常。而吾則知。吾子之於倫常有更厚於常人者也。人或疑其淺於情義。而吾則知。吾子之於情義有更深於常人者也。予之知於吾子已如此。其期於吾子、亦豈常人之所

與知哉、而今竟已矣乎。清國之獲罪於皇朝也、吾子挺身深入敵地、具察其形勢、而還、既而從將發、來訣日。生也既爲不幸之子、又爲不慈之父。罪固不容於死、而其所以有偷生至今日者、唯有待於一死報國之秋耳。此行若徒逐隊而往、隨行而還、其何顔而對鄉黨之人。雖然生也不敏、恐不復得相見于今世矣。一語一涙、今尚彷彿在目捷之間。嗚呼、吾子結纓之意、已決於當時矣。而遂不能以予之所期易吾子之所決者、天耶命耶。嗚乎痛哉。雖然匹夫而拜口天顔于咫尺、書生而留英名于海外、是誠千載不朽之盛事。吾子之擇死所、何有可間然、然呪乎。吾子之奮前敢往、既足以使貧天廉懦天立。吾子之慘禍俊刑、又足以使志士切齒、勇士扼腕、十倍其忠憤之氣。而誰復以吾子爲薄於倫常、淺於情義者哉。對國爲忠烈之臣、對家爲孝慈之人。予之所知於前者、鄉黨親姻今悉知之矣。而四方勇於義、篤于志之士、所以葬吾子以異常之盛典、亦皆有欲已而不能已者也歟。嗚呼於乎。吾子可以瞑矣。陳辭告誠尚亨。

明治二十八年二月

東方齋 荒尾精

〔書き下し(案)〕

嗚呼〔ああ〕、天平命乎。命、吾固より知る。吾子の難を避けざるを。而して其の冒し難きの此〔かく〕の如き烈なるを謂わざる也。吾固より知る。吾子の死を辞さざるを。而して其の死致るの此の如き惨なるを謂わざる也。嗚呼、痛ましき哉。憶、吾子の始めて清國に遊ぶや、能く世縁の断ち難きを断ち、能く人情の忍び難きを忍ぶ。人或は其の倫常⁽¹⁾に薄きを疑う。而して吾則ち知る。吾子の倫常に於て更に常人に厚き者有る也。人或は其の情義に浅

きを疑う。而して吾則ち知る。吾子の情義更に常人に深き者有る也。予の吾子に知るは已に此の如し。其の吾子に期するや、亦豈常人の与知〔あずかりしる〕所ならん哉、而して今竟〔つい〕に已矣乎〔やんぬるかな〕。清國の罪を皇朝に獲る也、吾子身を挺して深く敵地に入り、具〔つぶさ〕に其の形勢を察し、而して還るや、既にして従りて將に発し、訣日來る。生也既の不幸の子と爲り、又不慈の父と爲る。罪は固より死に容れず、而して其の所以に偷生⁽²⁾有りて今日に至るは、唯一死報國の秋〔とき〕に待つ有る耳。此の行い若し徒〔いたずら〕に隊を逐いて往き、隨行して還らば、其れ何の顔して郷党の人に対すや。然りと雖も生也敏ならず、恐くは復今世に相見るを得ざる。一語一涙、今尚彷彿として目捷の間⁽³⁾に在り。嗚呼、吾子結纓⁽⁴⁾の意、已に當時に決す。而して遂に予の期す所を以て吾子の決す所の者に易る能はざるは、天耶命耶。嗚乎、痛ましき哉。然りと雖も匹夫にして天顔を咫尺に拜し、書生にして英名を海外に留めるは、是〔これ〕誠に千載不朽の盛事たり。吾子の死を択ぶ所、何ぞ間然とす可き有らん、然らば呪う乎。吾子の、前に奮いて敢て往き、既に足すに貧をして天廉⁽⁵⁾せしめ、懦⁽⁶⁾をして天立たたしむを以てす。吾子の慘禍俊刑⁽⁷⁾、又足すに志士をして切齒せしめ、勇士をして扼腕せしむを以てし、其の忠憤の氣を十倍せしむ。而して誰ぞ復吾子を以て倫常に薄き、情義に浅しと爲す者なる哉。國に対して忠烈の臣と爲り、家に対して孝慈の人と爲る。予の前に知る所の者、郷黨親姻〔姻〕⁽⁸⁾今悉くこれを知る。而して四方の義に勇にして、

志に篤きの士、所以に吾子を葬るに異常の盛典を以てし、亦皆欲する有る已〔のみ〕に而〔して〕能はざる已〔のみ〕の者也歟〔なるか〕。嗚呼於乎〔ああ、ああ〕。吾子瞑するを以てす可し。辭を陳べ誠を告げ尚〔たつと〕び亭〔まつ〕る。

明治二十八年二月

東方齋 荒尾精

〔語註〕(1)〔倫常〕人倫の道。五倫・五常(父子の親、君臣の義、夫婦の別、長幼の序、朋友の信)。(2)〔儉生〕いたずらに生きながらえること。(3)〔目捷の間〕「目捷」はめざとい、めがはやいこと。(4)〔結纓〕冠のひもを結ぶ。「子路曰君子、冠不免、結纓而死」(左氏、哀公、十五)「身を殺して仁を為す」一つの極地。(5)〔廉〕いさぎよい。(6)〔懦〕よわい。いくじない。(7)〔慘禍俊刑〕意味不明。特に「俊」字は意味が取れない。(8)〔親姻〕「親姻」の誤。縁続き。

弔詞の中に「吾子を葬るに異常の盛典を以てし」云々と述べているので、葬儀に参列して述べたことであろう。推測を述べれば、情報不足で断ろうとしたが、結局出向いて弔詞を読んだ。通常事前に書き上げられているべき弔詞ができておらず、素案で臨んだものではないか。

内容は、「人或は其の倫常に薄きを疑う」とあるように、鐘崎三郎の生き方に対する批判を覆すことに主眼を置いていると見る。「予の前に知る所の者、郷党親姻〔姻〕今悉くこれを知る」とあるように、地域の人たちや親戚・身内の人たちに鐘崎のこと

をよりよく知ってもらいたいという主旨のものとする。「吾子結纓の竟〔意〕、已に当時に決す」とは、鐘崎の「身を殺して仁を為す」という心境を汲んだものである¹³。私見となるが、納戸鹿之助はこの弔辭を知らなかったとは思えない。採録しなかった、あるいは採録できなかった理由がある可能性は捨てきれないと思う。

四. 荒尾精の故山崎羔三郎に対する弔詞

山崎羔三郎に対する弔詞は『門司新報』明治二八年三月二九日に掲載されている。ただ印刷の状態が鮮明でなく判読できない箇所があり■で示すこととする。

嗚呼、士負命世之偉器、抱絶代之雄志。北馬南船、風餐露宿、未嘗一日寧處、而天遽奪之年、素心未■吞恨入地、人生之悲惨、愁恨寧有甚於是者乎。况乎、如吾子身繫于異域之囹圄、頭斷于醜虜之劍刀、忠■義烈、至死不變。海内聞者、莫不慄然生粟、潛然泣下、眞所謂使■夫廉儒立者而吾子■世之抱負則遂已矣。吾獨何心得不慟哭至失聲哉。嗚呼哀哉。吾子之就予於漢邑、同志之士四十有八人、忠肝義膽並不相讓、而吾子最以沈毅勇敢、見推予之相視、更有大焉者、一旦蹶然投袂而起、南探台灣之形勝、西窺安南之輿區、爲賈爲醫■嘗酸苦、遂以跋涉四百餘州、是將何爲而然也。予之養士於上海也、吾子又來助事當時邦人急於採泰西文物、殆無復憂東亞衰運者。然吾子興亞之雄志則愈運銳、吾人之得力於吾子何勝言焉。而今竟不可復有望於其偉器矣耶。嗚呼哀哉。自征清之役起也、□皇師所嚮無堅不破、無固不拔。吾子之所効于若國海内普知之矣。而吾子所輔導、後進有爲

之士、樹勳於戎馬之間者、亦洵不少、若夫單身入虜營挺進横行敵地、則神人所共感動、吾聞金州埋骨之處、特標曰忠死之墓、將師士卒相率而厚葬之、然則吾子之可■暝者固■馬■然興亜之偉樂前途悠遠而漢口同盟之志士浦・廣岡二子失、其所之石川・藤嶋二子前後斃于敵勿、而吾子又遂遭慘禍、■生無依、蒼天茫茫、若之何其不起、朝失一手夕亡一脚之感■。嗚呼哀哉。

明治廿八年三月廿五日

東方齋 荒尾精稽■首拜

〔書き下し(案)〕

嗚呼、士は命世⁽¹⁾の偉器⁽²⁾を負い、絶代の雄志を抱く。北馬南船し、風餐露宿⁽³⁾し、未だ嘗て一日寧処ならず。而して天遽〔にわか〕に奪うの年、素心⁽⁴⁾未だ■⁽⁵⁾ならず。吞恨〔恨みを呑んで〕⁽⁶⁾地に入る。人生の悲惨、愁恨⁽⁷⁾寧ろ是に甚しき者有らん乎。況乎、吾子の如きは身異域の囹圄〔れいご〕⁽⁸⁾に繋がれ、頭醜虜の劔刀に断たれ、忠■〔愼か〕⁽⁹⁾義烈⁽¹⁰⁾、死に至りても変ぜず。海内聞く者、慄然として粟を生ぜざる莫く、潜然と泣下し、真に所謂使■⁽¹¹⁾夫廉儒をして立てしむる者に而して吾子■世の抱負なれば則ち遂に已矣〔やんぬるかな〕⁽¹²⁾。吾独り何ぞ心慟哭して声を失うに至らざるを得ん哉。嗚呼哀しき哉。吾子の予に就きて漢邑⁽¹³⁾に於てや、同志の士四十有八人、忠肝・義胆並びて相譲らず。而して吾子最も沈毅⁽¹⁴⁾勇敢を以てし、見れば予の相⁽¹⁵⁾を推〔お〕し、視れば更に大有り焉者。一旦蹶然と袂〔たもと〕を投じて起ち⁽¹⁶⁾、南して台湾の形勝を探り、西して安南の奥区を窺い、賈と為り医と為り、■酸苦を嘗め、遂に以て四百餘州を跋渉す。是れ將に何ぞ為して而然らしむ

也。予の士を上海に養う也、吾子又來りて事を助く。當時の邦人泰西の文物を採るに急ぎ、殆ど復東亜の衰運を憂う者無し。然して吾子、興亜の雄志なれば則ち愈運〔めぐら〕し鋭〔すす〕む⁽¹⁷⁾。吾人の吾子に力を得て何ぞ勝言⁽¹⁸⁾するか焉。而して今竟に復其の偉器に望む有る可からざる矣耶⁽¹⁹⁾。嗚呼哀しき哉。征清の役起りてより也、■皇師の嚮〔むか〕う所堅く破らざる無く、固く抜かざる無し。吾子の効〔いた〕す所、于〔ああ〕若〔なんじ〕の国、海内普くこれを知る矣。而して吾子の輔導する所、後進有為の士、勳〔いさお〕を戎馬の間に樹つる者、亦洵〔まこと〕に少なからず。若夫單身にて虜營に入り挺進⁽²⁰⁾して敵地に横行すれば、則ち神人感動を共にする所、吾金州埋骨の處を聞き、特に標して「忠死之墓」と曰い、將師士卒相率〔ひきい〕て而厚くこれを葬る。然らば則ち吾子之可■暝者、固■馬■、然して興亜の偉樂〔業〕⁽²¹⁾、前途悠遠にして而漢口同盟の志士、浦⁽²²⁾・広岡⁽²³⁾二子失し、其所の石川⁽²⁴⁾・藤嶋⁽²⁵⁾二子、前後敵勿〔刃〕⁽²⁶⁾に斃され、而して吾子又遂に慘禍に遭う。■生依る無く、蒼天⁽²⁷⁾茫茫⁽²⁸⁾之の若し。何ぞ其れ起たず、朝に一手を失い、夕に一脚を亡うの感■。嗚呼哀しき哉。

明治廿八年三月廿五日

東方齋 荒尾精稽■首拜

〔語註〕(1)〔命世〕世に著名な。一世に秀でて著名な人。(2)〔偉器〕すぐれた器量のある人。偉才。(3)〔風餐露宿〕風を食らい露にねる。野宿すること。旅行の辛苦をいう。(4)〔素心〕かざりのない心。潔白な心。本心。平素の心。(5)〔■〕西偏の文字か。

(6)〔呑恨〕うらみをたえしのぶ。(7)〔愁恨〕うれえうらむ。(8)〔囹圄〕ひとや。牢屋。(9)〔忠■〕「忠慎」か。「忠慎」は、まことがあってつつしみぶかい。用例は『列女伝』でやや異なるように感じる。(10)〔義烈〕すぐれた忠義。(11)〔■〕旁は頁の文字か。(12)〔已矣〕「やんぬるかな」もうこれまでだ。もうだめだ。絶望の辞。(13)〔漢邑〕漢口。漢口楽善堂を指す。(14)〔沈毅〕おちついて強い。沈著剛毅。(15)〔相〕「みる」ことか。(16)〔袂〔たもと〕を投じて起ち〕たもとをふりはらってふるいたつ。(17)〔運鋭〕「運」は「めぐらす」意、「鋭」は「すすむ」意か。(18)〔勝言〕言うにたえる。(19)〔矣耶〕「矣哉」と同じか。詠嘆の助辞。(20)〔挺進〕単身、衆にぬきいでて進む。(21)〔偉業〕〔偉業か〕「偉業」は不明。「偉業」は大きな事業。大業。(22)〔浦〕浦敬一。「十二烈士」の一人。(23)〔広岡〕廣岡安太。「十二烈士」の一人。(24)〔石川〕石川伍一。「九烈士」の一人。(25)〔藤嶋〕藤島武彦。「九烈士」の一人。(26)〔敵勿〕。「勿」は「刃」の誤。(27)〔蒼天〕天、あおぞら、大空。(28)〔茫茫〕広大なさま。ひろびろとしたさま。

この弔詞の日付「三月廿五日」は葬儀の予定日であり、実際の葬儀は、雨天順延して、翌二十六日に行われた¹⁴。内容は、刑死の事情等をきちんと踏まえている。その上で、漢口楽善堂以来の関わりを押さえ、山崎の中国旅行の意義を称揚し、加えて日清貿易研究所における援助に論及して、日清戦争に及ぶ。荒尾精から見て山崎は、漢口楽善堂に付き従った四十八人の同志の一人で、「吾子」と呼ぶ。そして浦敬一・廣

岡安太を前、石川伍一・藤島武彦を後として、漢口楽善堂の志士の死の一環として山崎の死を位置づけている。

おわりに

荒尾精は日清戦争に際して、京都若王子に籠もり、日清の将来を注視していた。教え子たちの死に衝撃を受け、日清戦争終後に根津一と共に「征清殉難九烈士碑」を建立している。九烈士に対する思いは深いものがあつた。

漢口楽善堂の性格から見て、荒尾精が山崎羔三郎を「同志」の一人と位置付けるのは理解しやすい。注目すべきは、「旧新同盟諸君」と記して、日清貿易研究所の学生をも同盟する志士と見なしていたとみられる点である。また荒尾精は、ここに掲げた二つの弔詞において、両者を共に「吾子」と呼んでいる。荒尾からすれば両者ともに同志であり吾子であるという意識なのであろう。

一方向野堅一は、両者を「友人」と呼び、山崎羔三郎の兄白水到に宛てた書簡中で「朋友之義務」（『従軍日記』一月十八日）のあることに論及している。日清貿易研究における相互の意識は、柔軟な同志的、朋友的な結びつきであり、相互に義務を負う存在と認識されていたとすることができよう。

ここに紹介した弔詞の内、山崎羔三郎のものは、判読に苦しむ箇所があり、一層の課題としたい。また附した「書き下し」にはやや苦しい箇所もある。博雅のご批判を賜れば幸いである。

としている。

2 さらに、向野堅一を除く五名に、中国において刑死した石川伍一・楠内友次郎・福原林平

1 兩名については、官命により、明治二十八年四月十五日を死節の日として取り扱うこと

・藤島武彦を加え「征清殉難九烈士」と称す。なお井上雅二『巨人荒尾精』（東亜同文会、一九三六）は、さらに漢口楽善堂時代の調査旅行中に行方不明となった浦敬一・広岡安太に日清戦争に投じたわけではないのに刑死した高見武夫を加えて、「十二烈士」とする。

3 本稿は、烈士すべてを調査対象としたものではなく、したがって荒尾精の記した他の方の弔詞も存在する可能性がある。別に調査・検討する課題と考える。

4 遼東半島において、「三崎」の慰霊を主導するのは根津一である。向野堅一は、根津一の心境を最もよく知る人物である。向野堅一は、さらに「三崎」の死体発見の報告を二月十七日に行っている。その後、三月三十日の夜、夢を見る（『従軍日記』三月三十一日）。これまでも何度か「三崎」の夢を見たが、今回は猪田・大熊の夢で「如斯基夢ヲ見シコト始メテニシテ、実ニ信真ノ如ク思ハレタリ」という、リアルな「一柯ノ夢」であった。その中で向野堅一は「…（略）…又根津氏ハ、毎日君等ノ事而已心配セラレ居ル故、是レニモ電報ヲ打タレヨ」と猪田・大熊に呼びかけている。向野堅一から見た根津一の姿ということになる。

5 『威風凜々 烈士鐘崎三郎』二三六一二三七頁。

6 御幡雅文は、長崎における中国語の師であるだけでなく、鐘崎三郎の婚姻にも関わり、加えて、日清貿易研究所でも教師であった。『威風凜々 烈士鐘崎三郎』二一一二二頁参照。

7 なお、藤崎秀は鹿児島出身のためか、向野堅一『従軍日記』には遺族のことはみえない。

8 御幡雅文は、長崎における中国語の師であるだけでなく、鐘崎三郎の婚姻にも関わり、加えて、日清貿易研究所でも教師であった。『威風凜々 烈士鐘崎三郎』二一一二二頁参照。

9 この両者の葬儀は、それぞれ三万人以上の参観者を集めた盛儀で、注目すべき内容を有している。ただここでは論じることができない。それぞれ別稿を用意している。また上述の内容も、別稿においては、やや詳しく論じる予定である。

10 実際には戦況を注視している。「十二月念二日」付け宗方小太郎宛書簡はそのことをよく示している。

11 従って、納戸鹿之助を基礎に資料を収集している『威風凜々 烈士鐘崎三郎』（花乱社、二〇二一・五）にも採録していない。なお該書は、納戸書を核としつつ、史料に見直しを加え、今日的な視点から考察を加えたもの。一般の読者にも配慮して、句読点や表記、ルビなども工夫している。

12 『威風凜々 烈士鐘崎三郎』二三三一三四頁。

13 私見では、「此の行い若し徒に隊を逐いて往き、隨行して還らば、其れ何の顔して郷党の人に対すや」の箇所は、言い過ぎではないだろうか。

14 山崎羔三郎に対する弔詞のなかで「三月廿五日」というのは遅い日付である。本来葬儀の行われる日であり、郵送して間に合う日ではない。

〔謝辞〕本稿執筆にあたり、森部眞由美氏より鐘崎三郎に関する葬儀記事ならびに荒尾精の弔詞の存在について教示賜った。さらに『福陵新報』の記事の確認までしていただいた。記して感謝申し上げる。